

三重県

僕の決意

高田中学校 一年

山中 健資

「ちよつと誰かあ。シャワーのお湯が止まったんだけどー。」
お風呂から姉の声がした。

リビングでくつろいでいた母が見に立った。

「えっ、本当に水が止まっているよ。何が起こった？」
慌てた母の声で皆に緊張が走った。

二〇二三年一月二十五日。十年に一度と言われた最強寒波が日本列島に襲来した日だ。僕の住んでいるところは、霜が降りるのもひと冬に十回ちよつと、雪は数年ごとに何回か降る程度と、比較的温暖な町だ。ところがこの日は、後に聞いたところではマイナス八・七度まで気温が下がっていたらしい。そのためにマンションの北側に設置されている受水槽への流入管内で水が凍結し、夜に多くの家庭で水を使用するにつれて受水槽が空になったのだという。

さあ困った。幸い浴槽にお湯が張ってあったため、汲みだし
て使おうとしたが、シャワーに頼る生活になっているので、洗面器がない。台所のボウルを動員して入浴は済ませた。バケツに汲んで、トイレを流した。既に用意してあった食事を済ませたが、いつものように食器に盛りつけてあったため、まず汚れを紙で拭き取った。五人分の食器を拭き取るのに、多くの紙が必要で、ごみ袋はあつという間にいっぱいになった。拭くために手を汚してしまい、水で洗わざるをえなくなった。洗剤を使わなくてすむものはスポンジでこすって、すすいで終了。皿や箸は洗剤を使って洗い、ためすすぎをしてから、仕上げすすぎをした。皿をすすぐ母の動きに合わせて僕はペットボトルから水を流して手伝った。備蓄の水は限られているため無駄にはできない。すすぐ作業に合わせて二リットルのペットボトルの傾

きを調整してチョロチョロと流し続けるのは、思っていたより大変だった。ずつしりと重かったペットボトルがだんだん軽くなっていく。楽になってきた、と思う一方で、使えば目に見えて減っていく様子にふと、水って有限なんだった、と思った。水がなくなっていくことに焦りを感じ、無駄にするまい、とペットボトルを支えなおした。

世界では、十分な水が得られる地域は多くないと聞く。安心安全な飲み水ともなると、さらに限定的だ。持続可能な開発目標(SDGs)にも「安全な水とトイレを世界中に」とあるように、安全な水を手に入れるための取り組みが今、世界中で行われている。内戦が激化したスーダンもその地域の一つだ。退避が報道されるようになってはじめて、スーダンに多くの日本人がいることを僕は知り、その人たちの多くが、水や食糧、医療の支援に携わっていたことを学んだ。退避によって支援が滞るだけでなく、その支援によってこれまでに届けられた水関連施設が、爆撃で破壊されたと聞く。生きるためにようやく手にした安心安全な水を、また人が奪っていく。過農耕や過放牧、過剰採取による砂漠化も、地球温暖化も、人が後先考えずに行動した結果だ。これから何十年も先のことを考えて行動すべき時にきている。その時代を支えていくのは僕たちだ。

幸い、家の断水は二日ほどで徐々に解消されていった。その後もしばらくは、「今、水を使っているのか」「水を使わずに乗り切る方法はないのか」と身構えてしまう習慣が残った。正しく節水できたのだろうか。手を洗う回数や洗濯を減らすのは衛生的にどうだったのだろうか。食器を拭き取る作業のせいで紙ごみが山のように出たことや、皿を汚さないようにラップで覆うためにプラスチックごみが増えたのは、果たして正しいことだったか。僕の中にはモヤモヤが残った。蛇口から出る水は無限ではない。譲り合って世界中で安心安全な水を飲めるよう、未来を見つめた行動をしたい。